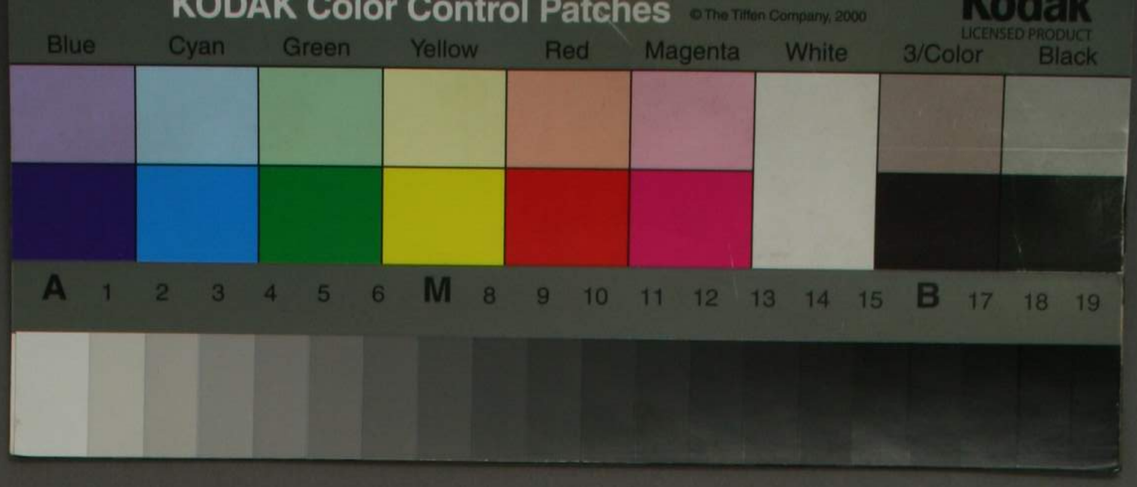


KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

特別
ヘ5
6272
1

寶玲文庫

桜山家蔵

58 2151

一 武田豐鶴
二 以呂紫詞
三 四季詞
四 北季詞
五 神祇

ことなれと無くなれ
とやなんなるに古稀れ
こころの程ばしあわう
神もこゝにさんなは
志りし

六 釋教
七 述懷
八 哀傷
九 山類
十 水邊

十一 体用之物
十二 可傷之物
十三 可傷五物
十四 可傷七物
十五 一可可嫌物

十六 轉廻之事

十七 嫌間之事

十八 不之惟友

十九 教句切字之事

二十 句數之事

廿一 本云執様之事

廿二 執筆之事

廿三 一座法度事

廿四 立席法之事

廿五 和漢篇

一 武田豊前

夫連類根源ハ仁王十二代景行天皇四十年日本武尊東夷征伐の時甲斐國酒折社宮に志て新治洗く夫の言葉より里お二代の掃本武日元来ハ建治二年に鎌倉發答にとりて為桐ひそ述作ゆへ其後新本田ハ大酒を為藤ひそ作也然後善光開拓政出庭安立年に改め書あらはへら

渡邊千秋藏書

アナキ
横山家蔵

新しく二代制式目進かと號を又新式今あと
八後事 因す関白殿下もろ〳〵の好士に
規矩を集て宗砌法師に相談あり此時の
宗通まで山法之事新と云ひ事法元年
に是を出然に以敬宗祇に逝せ後毎
座諍論ありとよし事出来ぬこれに
よりて文龜二年に省柏老人
勅ひうしまたてまつりの時まるをひろひ出
あらたむと普用新式目の一冊なり

式一

景行天皇四十年より天正九年
後宇多院法宇 建治二年より應安
五年まで九十七年
後圓融院法宇 應安五年より法元
年まで八十一年
後花園院法宇 寛法元年より文龜

二年さて五十一年
後柏原院治宇 文龜二年 天正の
年まで八十年
正親町院治宇 天正の年に
記之
建治二年ちい天正の年まで三百六
年なり
今上当事 慶長二年正月
清書之

二 以呂波詞
い
岩船 あまつ神くすつ神の好し給ふ
是也日本記上書に天磐櫛
舟と云へ船も同事也 名当にあらしい給ふ
船は字すは事のことくこの篇七句也
伊勢社神といへハ名也あま
て新神といふ事ハ

此名に名神名にあらまとは此社也

伊勢齋宮

伊勢齋宮聖義の齋院いつきも

いにしき社宮といふ也伊勢にてハ竹社宮の

ちなや聖義にてハあかきにの御二社

なり也

敢生

神祇也名也也社也生社にこゝ

きこふい博大菩薩の神力にて

書老年中にて実敵我おかきおろかし

社ふゆんに生るとはなつ御撰ひ給ふく

也一

定し侍り罷侍に雅長老子御名不他魚の

事よりおこれり

いまひぬしのみこと

又天児屋根社余いにしもまた日四はし社

の宮云のうち社名なり日本ハ神國こゝに

よりまつ三のみ面しろ社事ハ

りけものなり

いみ作事

神祇也かみまつりなとに

かふまつり侍んとて

へうれ

象 は象と云字つゝへうす事やきなる
いつゝとまれハ雜也

稲 一をしね一にかに秋の田なるまとれ
をかへてあか稲のかりいなはなとも
なし

花裳乃色於也木木
桂林にあらすといへとも草木ともに
季節もつゆへにこる嫌へし數冬多也

うめなと云類なるへし

多 といふにうけろ也なとうらうれ
めきこるる事 無しの取樣しきのれ
きこゝ嫌也

百風 は山風あなし明ねはたしきる事
なと云新何も風の文なれこる
きこゝへしもとうは風と云字なは同字
ちなり居所に打越を嫌也

いへ法と 此にはこ句やみにり
まゝハすと云説悪し

庵 二新書にいかいかわと二とあれ共
を代ゑ用へすとも二也にいかり
くと二ハなし
板屋 みにこゝ嫌也みにみ初いゝ事
ハきこえらしと云説悪し只
板屋なるしかれ
いわあれ にのの字多き此字とも不
こゝるきこゝ多此字無
此字なきこゝ用とも説悪しきこゝ
なり

市 此一名にて一此類多し
いとあなきにまゝ屋なと付る
なきこゝ不可然なり
此うへまゝめけこれにかゝるや
いもあれ 人倫なり
いもかれ 此の字なし可嫌くと
いへ付るをもきこゝ
とも説悪し

生死に生れ命ともに二ゐ嫌迷懐也
迷懐の三柴に奥に住こく
一多数にて類れいのち杉とかへて
又すへし志かれハ二なり
いすしへ たゞ一なりて古文にかにし
なとゝ三柴二ゐ嫌也
後にまゝと二ゐまゝにゆめけにて三柴
何も只一なるへし
いさ りかに付ゐもかるしかれ他
逢こ

いけ身と二いつこ一いけち一面と
かへて四也いつ身二れ君ハ杉
とまゝ事也
いけ いけくなにまなれなとゝいけ
かへ事ハまゝみれ二ゐまゝにゆ
いけしゐ なとゝ三柴六一なに
なの俊とか事とも何の
字にかしく二ゐまゝ事へし
いかゝ杉也 なととすまの五のな
いけまも六一也事ゐ

ろつやうに志るしてこゝろん自体可又おなし
体なるは二ハ以て とゝろ也

ろ

ろふ みにの体なり

は

紫なる乃神 うへものにてこゝ者也
雜也

四也三も不若と云説也しかれ
も二三四を物ハ杉をかゆるや

だ不紫 と法しけてもの論正なり
雜なり四れうちやめけなる
毒者とかゝるなれハいつきと雜なり此
物によりて其法よりて其ひかりて其ある
にさるなり おほし

花に付る 風雲の類と新出定雜廻
れ不可しまゝを未強て
不及其法くと云ハ花に風雲月に霧霧

むの　袖の香ちと杉と嫌さりの白れ
ちといふに袖我人をちと香
と書こふへし
むれあるし　人倫なれ此の御白体
うち任て此ふに事ハ
人倫こるへし
むはあるし　目はあなしを
人倫にあらし
むのふく義　もとよ望うへもれや
非隆和善く人の

志るなれは和学のこめ有詞ハ載て
むの雪　隆和にあらし　種和なれ
ふくきに日本れことりれ
なれとも云ひけやもくらんか為なれ
むれ雪　むの波むれ波
以上は類有ニ書こふとは種和隆和
有意ニ何も有ニ書こふとあるに也む
の説同ふと以へともむのちる体といへハ
是ハ種和のふ牛也性変師説ものや

花は殺ふ為に堅山を多くと云
と云字のともなるは此稽ことに稽
体なるは稽なり
まし にはなやうと云詞こゝ事と
云説悪し形と可嫌然ハまりやか
といふ云然正むこゝへし此可ゆゑと
いふ
花に吉照はるす嫌や萩に字誠照
云然りしらゝ同ならず

花は敬 正むなるは正むなるといふ
説悪しを代人のいひ出されし
説や不可用之
花はまくらむ
花の袖ホ
種物や正むや此可ゆゑ体くといへり
花右 正むや種物にこゝ可嫌衣類の方
本や然ハ花の袖と同ならべし
花はら 正むや手ゆんハ櫂ハ事の
なやまるはそ時常く然

むと多なれものなり

五葉 殿ゟ脇者三のかゝ面に せき面に
嫌れ奥に住こく一の杉に下ゟ
れむ悪しなと云説田本説なり不若

むかし に屋なとれやうなる物付なる
悪しとれ乃いれことにてしし

紫 まことのえこころはなと五句嫌なり
ことはといれてハ紫に一向不嫌を

紫れ宮 四とはまた紫宮紫ホの名
とさくぬ木の紫斗れなるや

草の紫行れ紫ホハ五句さや落紫又ハ松
の紫なとおれし西伐きこ嫌と云ハ悪し
是ハ杉と嫌なり

春月 只一ゟ的一三日月一と新式
にあかりとよりまた紫の目
なといひて一本なるゟ的なといひて一
三日月の霊むなとこて以上三や夜れ
月冬の月日ホやと云冬にあやまり
はるなれ二詮ゟ的秋に一也季に一已上
二ゟ里三日月ハ四季れ男ゟし只一や

一座に三句の物れうちにのこるハ六月
とき明と三日月と三体にそて一季に
もまゝとそいや

春の宮とうきうの御子也 春に春
にまるへ歳といふ

春秋日 といふ句にまる歳ハあら
ハ永日 星日 世に杉とあ
輝秋乃秋も日本志れ世の御句体須

春乃雪 通て春の雪なと不可きとハ
中古の儀やしは不若

春風 六一春秋風とのもしとのて
又一とあ秋世を代ひたかゆる
にあ及二や秋風 松風 日本 従ひの風
とのもしとのて二ハなし秋風 春風も同し
何もものもしのて二ハあるへからひ

橋 六一 御階一名石に一字橋一夏の字
はしなと いはて一と 春日に 又こゝ只
はしるてうらに御階あ又こゝ夏のう 春橋
も又たゝう 春夏し もなし 秋字なれハ
杉とそこ来へし

はゝ里 三かりまつくハ有くりせ有
まつ嫌也
えや といふ三葉にえをやも一向不お
嫌ろく
は とまてまをえにさもあらハあきとま
えもし不嫌任他と出ゆへや
はとは こゝ嫌とかうてしめけの
てまをは濁ハみりこゝ嫌也
に

賀 生れまこゝ嫌也依る神祇に
あらはるゝもすのまや賀なと
いふまハ又別のまや
産大 神祇やくなる産に杉をきらふ
へし
庭と砌 とのまに杉と嫌也杉をかへまゝ
も立るさやれによりまて杉ハ
まゝへとも杉琴里てハ二ゝもまゝ
庭 只一寺皇みかの男に一庭のをしへ
ハ各に杉るやは産れ別とくしく

ふゆゑに杉を替へし

庭乃佐寺山 山類に二句ゑらふへし

にまさ佐みみに二句の嫌を

と云字すも二句や

鶏 和名をかけの名同るや異名ハゆふ

つけ鳥をだかけなとも表合てふるら

とそり此鶏を代用捨れ云なり

すゝの海 水海乃熱久なりゝ久ゝ

集に近江の久にの

ゆゑに表り名に三句ゑらふ嫌へし

すゝひ 可手面ゆゑ事へし 多

さ久まの云り 載之

に稲もみて也 き面に桜嫌へし是

もはもしのにの

此物はれ ハ杉を嫌物を面をかへて

このまゝ 壁ハ雪ハ杉を嫌へ

世卯の也の雪なといへハ裏にまゝ心や他準之

錦 に石柴付へかゝ寄ましきもあるき

多をおめていへハ也もみちせに

ほし　に月日ともに三る嫌也同次の月
月次の月にはこるまこ事也
星月秋　秋ゟ申月の字にはゝる
一ゟ　一ゟとゝ表きのまとかくし
郭公　て一已上二のまこ時雪をて
さてのだおほまとまし
時雪　に涼し表まと付ける西し指合に
ハあら祿共時雪お遠まるゆへ
やめけそ安お雪要也

おこ　冬也秋ゟ也
ほそ江　と中ハ名にはあらけつこの
おうほまといへハ自論名にや
蛍　ゟ一秋ゟ也名雪にあらけ
おと里　に野雪山迹まとの雪の字二
ゟ表らふへし
おおまして　まとのおのといふ詞
百韻に二中也他準ゟ

へ

牟城へて　まと云詞に糸をへて
まと云詞一向不嫌を

道のへ　まとの辺にあこれまと二ゐ
まこゝ米へし

と

豊明　枕子にあらひ明れ字より五ゐ
まあらふせ冬なり

二とせと一さ牟まといひて一こ
とし云てハとし二のうちやとし
といひあらひゆへや

牟こ　枕　れ　あとしゝ云に書ハ来て
まと付る故同言や
此すくい皆比與なり

毎度　と　いつにまを書同あ
毎度此類ゆし出れゆへ
り載こ日言れるす下書りくはしを
全こ

幸里小聖 名にや居にまあらん
と云説也しか為居に
戸 四やとおう関のと先戸ものの習形を
替るや戸ゆし各のとまとを四のうち
たるへしといへともとさしゝ四れか
るるへ我りと云説あり此りしとも又四の
かゝ小治定を天れ戸ゝ此にまあらん各ゆ
えるや
戸 に寫門とゆしまと何ともあ我嫌や

戸ゆあくる に狭の明る付る斗嫌
にまくはしるゆこく なり奥のあもしれ
戸をこくく おもしく戸とゆを
りあらん まともりし狭ゆ
とゆし みにまこるや
れまや 多寄りあらんみにまは
出るまゝふや

苦しく船 なと云に降物西しは
頸付るみ此に異也
とのぬもるゝ
といふ羽根ふなわ
友 只一鳥獸なとにて一月むを友なとハ
人倫の友に形を替れと云説あれハ
又一あるか
とも法なり 友の字不嫌ろゝと
へまかとゝゆ
へまかとゝゆ

虎 千鳥すも只一なれ兎猫犬狐ホのけや
鳥まれ抽の頸みに百韻に一也
鳥 与一是鳥一は小鳥村と里の男に一
鳥獸といひて一禽獸生れの恵文
なれハ也狩場の鳥は本より雑也うまれ
れ鳥ハ名とゆ也狐鳥ハ鶏也はホハ名の
のれなり名のあると里ハ五句也
鳥乃老啼 なとにて雁の声
鳥なとも我嫌也也
準ゝ

鳥於嶋に鐘れなるなるこなと付
白と嫌や他準え
鳥うにかゝ鳥なると立白さや同西不若や
ちと里と同本
鳥の羽風 式に風体なるへし
鳥にかゝ鳥西成きこふへき類
鳥於ぬれ ねなるなとしていかも
於ちにあられ

と里し於 考 なと云詞生れ
に打越と考こふ
なり鳥と云字にはなり白さや他準え
白船 於ちにあられ當といふ字には
立白さしふや
白 名迫や船なくていめるとこの極楽と
まるなとハおのるやとまり山なとハ
もとこの里なる成名のるや物のるなりハや
燈 只一鈴の灯一形の燈一形をかへて
以上三や手白さなりの何も形と嫌や

嵩大と行を嫌や而故琴て不苦とこそ
悪し又此説不可然嵩大川物こそ故に而を
かへて可きと云り此理に可治定同しすと
いひくへをやうす説其破邪 頭正の為也

とも し 文也数分なり

と故 或 にをちまつ苦に二句嫌也
逆きといふ字に五句を也

討 にとふ付へくらひ

とくむる に関すと付るす悪しおもし
るすや他準之

ち

子 子 拾 千の字に五句り里に可嫌事
の字拾孫字ともに二句斗嫌
へ来くとくらぬ

子 孫 字 行に一法を事法を異説性
に変師説法ゆへ之の不寧
恵為明師指南者也

鴾に千の字わをきゝ嫌へし

子繪に文章付へくれたゝ事に文章ハ人なしくゝ事

子罣とりまゝハみにはあらひ

路と路との間七句をとゝ古文不謂只五句をなり

路と路との間も五句をなり此五路紀路なとに文乃道なとゝ

り常にあらぬ道二句嫌也又法路重路

まとゝり常ならぬ路にい常の所二句嫌也

路に其地を所地一向不嫌ゝ此路の心

に用さらんなるは付侍らんなり而

又用捨

ちさこに所日しるや二句嫌へし

散と云字琴里てハ五句を也用ゐり

不苦むのちるに和歌にそちる

ならはきゝ者へしは文字のにまもの

茅乃輪 なとゝるゝて茅原淺茅生
なともふみそけうちゝ一
なりちの日なや

芝 一ちゝ社世なとゝて又あるへし

契 とゝ為にたのむるなとゝ詞おほし
ちゝなれ此法の体なるや 儀ハ契り
とき濃るなれしかなさとゝにこのめて
まいれしなといふ為悪しだのめしハかく
物ハおもはしなといふのうるへし是

かとの工夫よりくいはへしとゝへゝさ
もれるゝに事ハなくはともそこしを
須もなく萬かすかなるにうしそうある
ゆへうしめけとなれたく寄るは同言のみ
なる物なり

り

里ちゝ社しへ 社也種文の連歌
なとなりもしに
つなりこる時流名輪廻なとゝ主なへし

雑膽

かりそうだんと云也

ぬ

ぬし　人後にあるしあるしとゝんは人後なり

ぬる　に伏二句嫌やかるしくなると同るとあわ不謂行家ハ不嫌と云説尤也

ぬるく　なといふ初行と嫌百伐嫌と云説悪しぬるくに於かた百伐嫌也

ぬまく　袖なとも降物にぬるくいすてに寄逆のいなくハ渡に一向不嫌と只袖としかぬるくなといえハ逆也渡に二句嫌也從二句渡てもおなし逆乃五句は内にはせい

滝ぬる　なとゝぬるとゝ初ぬるとくの習二句ぬるくふぬれとくはあれたも二句也

ぬるといふ詞　にぬれ此間ハ付句り里ぬるくふなり

めにえぬ何をもおまし

婦乃ぬとをりんぬ　とのゐ付るを

まきりひ又このぬと我たんぬとのゐを

おわあれの時ハきこふや筆す一つんを

かきらすめにのさうれ我こまうりふお

まへまるや

婦於ぬとく僕　あひこ是ハ付るりゐ

まこふへし

をりんぬとく於　ゐ是ハ又二ゐ付わ

うへし

ぬらん　まとの三かれのとまいつき

も百韻に二なわゐわまらまハ

めにえ三ゝなゐ我きこふや

婦

とにまく　まとのまくとけくをかな

二ゐ嫌や此筆まれまとハ

不嫌くると當れかな上へ洗くきたるとき
説あれ共不可然是も嫌ひ故にくるし
とまたくきによりて我くに嫌との説尤也

こゝかれ我かよへる　なとの法
嫌何もてなとその一くれのとまるは日し

志かれらん　求れらん

なとれらんと三かなにてくれ可用百成
嫌と云説あり一向不謂志ぐ我こほるなれ

にらんなりまてなり他淫え

なし

罷れ屋ゝ　居にはあらまと云説
悪しみにや

罷　百韻に二れとつゝ名にくるへし他漢
法儀鳴濱汀洲仲庫上麓　掌坂岡谷
之類以上一ハ可為名云

是日　是て永日なしまた此日なとの
ハ人多はもしの云なへ

小墨 二字も一ハ名こるへしと
そわ
小船 すきて墨に船と又あるへしと云
説悪し小舟と行くをゆへや
小小 此あれこ五ゐきこふへし小小と
の書二ゐきこふなり
小小 此間付ゐり里きこふなわ
としろの をこ小船字不嫌男庫
と書ゆへやさをしら

まは小の字付ゐきこふへし
をみまへし めけの物只一也
とし孫 うへ地に二ゐきこふと云説
悪し五ゐきこ書へし
女 千ゐまもたく一也を幸せに用捨の
羽とゾへゆ此千ゐるとまは出てと
ゐるしかれまし きら
親に子二ゐきこふへし

青 に声響ホ二句嫌也聲ひゝ衆に
青羽山青岩河ホ嫌ゝ近国の
ととは此彼のととなし何なとあらは二句
きゝ者也他準之

青 にととつれ二句きゝふ也信の字成
とと法きとよ起ゆんなれ

をしまの 鳴の苧とまくとそれ谷ホ
かみしろとこゝきとよめる
ハ枝もなれ古木のなれ也ハきゝひ抱
句体によるへし他準之

をちてち と法くきてハ只一なれ
てあるへしと地とりと里又杉とかへ
こ地ゝ道社字なの字ともに二句嫌へし
をろう 述懐にあらず

和

我君 と云て主人為にあらひ平人の
いふへ家相にあらひ此の用捨

篤藥也從而御るといへとも此世用なり

和田乃原 御ゐり形を嫌也田の字
すはてゝりけり

わ年舩 藤也何年ハ藤にすゝ祢生
宮の何年ハ藤也何年
のまゝし舩なと志ても藤也

笑柴 たゝ木とも又うへ物孔久代
いさねとも世久ゐり笑柴と
まへし終ハ世久ゐいりゝ義 桓物なり
まゝ柴とはむ云やうすはいくとゝわ

笑菜 此一比かに菜つむなとゝ
もの可ゑゝ何といひても
菜たゝ一也まゝ也

わ汁田 桓物ゐ二ゐ嫌へしまやさせ
なといりゝ義に可嫌狭

忘草 忘と云字に二ゐ嫌善通すは
萱草と云里行者によめる
ハ忘也又清浦物すは萱草にあゝ事と
也俾物大和物語ホ和遠ととまゝ又これ只治
定ハ萱草也手詩に忘る愛草と云り

神 に雷二句をきらふ也 季新出月に
あり
神系 冬也 春秋也 神にて西成 春にふ
なり
神無月 に冬的付てハまへしまと
いふ説悪し五句嫌とそれ
神 といふ字にかみゆゑてと云詞を
嫌也 神祇にはあらず
上 といふ字にうへといふことは二句
きらふへし

春日 に春日ましのゝ嫌也 春の字日
の字一切に不可嫌こゝ
亀井 名にゆゑ名にゆゑあらまといふ
説悪し
川船 一切に船艘の河に入り里艘也
浦にてもつかき船に乗に何と
艘にあらず
河岸 とある句に柳と付て座垣門
なと悪しと云説不謂なし
かゝる事

何 [illegible] 面 面丁は輝へしとは
[illegible]と云事なれ以ては [illegible] 俗物ともは
蜷 [illegible]の字付てもくるしからしもと
[illegible]
貝 鰒や魚類やうなるは生類の輝やう
[illegible]あるまれなれ
[illegible] 沒のなれといふ四や
[illegible]ハ此れ字なり
[illegible]なり

門 は戸窓とけしとよりなるとそ思何も
面と輝やともしの不は多有なし
門 は世らの門なると此類五ゐ輝といへ
ともは同面をきしにへきくとそわ
[illegible] 門面はきしにふ出の字は二
白なれ此にあしは
垣 二やかきうまたといれかへをともこ
や此かまたくしとこハなし
墻 は かしに面はきしにふなるかこに居
此れなるまるといふ說悪しこゐ

きこゆへし

古きこき

かこゆ紫垣なとしても
みにはこ白嫌二句の如
ハ体なく称せ是ハ体やと云説悪し非体に
治定也

隠家

此一みにりおこしをまゝに
へし

かゝる世とり

すつる世のうまるゝ
此みゆまとゝなとゝ付はゆ同るなり

杜若

只一ゆけの物何も一たるへし

杜鵑

白論冬なれ雨何遠なとを拾ひ
てハ秋なる事ゆけそもの下書
の四季乃うちりの清れとも一ふし
きるハにこゝのや

杜鵑

極物におこしをきゝ事へし

杜田

是ゆるへし

田植うた　と一三字あしらかれ
なともまくらしる事
かゝりあらんし
梅　と和葉あはし　秋ともいふへし
ゆまき　と云ふにうわの等あとの
とも云事とも云ふ縁悪し
秋ともいふ也他　漆之
時は一冬や雑子付てもよろしかゝれ也
時とて国々の治乱次ころしとめけん

為子むしは和漢ともなし内氏尚使と
云事あわ時の使なと云ふも手にやけ哉
子時にし摩なと付てもよろしからず
荘薦時　一ふ摩かわ一けたまゆうわ一
以上三也
摩ゝ多里　とゆくうまなとのあれこ秋
とも云へし
時鳥なとなし　葉秋の田つくれ夏
也なるへかれ声をお遠せり
此点や

猪苗の里右 狩場の里に不嫌
の里まく群と同し只
の里なるにや此狩場苗かりころ主に志
てこゝん白ましは狩り嫌へしよ多く
ふおもへきるや

雁 まゝ一秋一巳上二なれ孫雁に まゝ秋
の中にまへし冬なるの白りあはは
まゝの雁まへらしい孫雁も秋る里越路に
のこれてをうをまゝ法をいへれ人乃あや
まるるや

雁 こゝてうれと斗ねに鳴なとかくして
いれてもまあるへらしい

雁 苗 古 ゆとゝ里みにまゝれ
走りけ苗 二のうち
うるへ未獲

里かま といふ白り響声 音
まと何もこ白嫌へし

鳥 只一まゝ やかいよ多同るなれ
まゝ日山まとにより使れらに 亀
もる抽といへれ孫れ亀まとそれ宮家以と

ゆきとも今又いまあれは用なり

かまろふ 生れ行あらはれ以下同

白体とゝへり

冠 衣類にあらず

髪れ 手 りまゆの毛なとの類

付へ くらき髪なとの類

人倫 うるへらはれ

良乃 雪 冬にあらはれ降物にあらず

かしらを とゝる岩根衣袖ホ何れ

と行数といひて も狭ろや

うしく りぬるにはなと不嫌

嫌とゝ説悪しとゝり

かくらへ 狭ろりあらはれ

雜や

うへ に照へなとの色の字二句嫌

なり

うこみ に夏の字二句嫌やなくめは

不嫌うく

うけハ陰也 夜か葉ハ新也 夜か葉ハ夕
か葉ハ黒なれ 此儀たまを志もるなから
むつかしきものや

陰 新 黒 何も此四ニ句をこふ
へし

陰にもと志にかゝれ何も二句嫌と
陰いふハ山もと木の志この類也 天か下
又志にこかれてなとの類又陰 夜かもと
月のもとなとの類不嫌かゝれハ此志に
よりいつれもをこふとまえ又さわ

新に黒根垣根なとまゝりけ陰すは
根の字嫌といふ説あり尤也

風に野ふこゝらしなといひても五句
嫌也 松の響 萩の声なとは二句
をこふ也

風に鳥乃羽ふくなと二句をこふへし其
外何も風体ふくにの嫌

かゝ 沈し 沈し 綿 まゝ也 衣類ハ
あらけ 数分なれ
下 裏に 多 陰を

丸 一此かゝ和かれかれ一ま里 殿ゐの
とめやうによりて才三りまてと爲
ける口傳あれと云説あり一向都道に仙法
のなれるや田舎説やかれとまてと一切
に不可有保乱作して不のるまれ其説
と破れへき爲也

丸 於字 殿ゐのかまはまへられ
祢かれかなハ又一まへし

雜 といふ字に通かていねかてなと云
羽二ゐ可嫌此爲故可嫌に治定せ里

ゐ ま し 哉 一座に二也法ゝ哉なと
も同しめ此の詞可準え
かゝ ま し 姉 先かましめるるまわ
殿をかれし小なとは
ゑとまるゝ也浦こく糸のつなてかれしも
なと云と同ならまる子とかれしふもおれし
終ハ物によりて嫌やう替るへし

し ゐ ま ちとりしやうにまとの
かに不嫌といへとも羽なり
よりて嫌へし何をむつかしきといへわ

まやらにとまるらにまと
いふハかなしこる
きこふへしこらなのてにと大なり
まらら まらら まとの疑ひのかゝ
字こる嫌他淫
かこつに意はらしみ同るなり
もはきこふへし
ら作祢字のるむしくかすく
まといふ詞付るもおか
あれをきらけれ

よ
代ニといふハ神代一君ら代一こるへし
此かりは代なとしもなし代と
いへ君も大君乃代ゆ
代り世立ちやめくみをあふく代
まとは此代やよりあふ故
まとハ世や
世るに中といふ字ニるきこふへし

世 に雖く人の謂るるや云詮平世一云
世といふも曰し ちゝや述懐於世二
佛の世一遍に一以上五やなへて世ハ志
盛なといふハ平世や浮世 道世ハ述懐の
世や志世後世なとハ仏乃世や何とも杉と
きこふや遍の世ハ何れのうしふなわとも
一あるへし 志りハ川合て五や
奈門 文選よそ云やよもて人とよ然り
世とすて人ととの字のてハ世
を捨人と書なり

蓮花 高 うへものみに高す
きこふへし
蓮生 居にて二ゐきこふなわよも
きとりまハみにてしこりを
きこりけ
よもき 姫 新茅生なとの生の字
杉ときこ出なわ 百韻に
二りまあるへき猶
嶮子鳥 只一春や雨くの秘説あり
たくさの鳥とりまの

よ如ゆの心はるや
よし 社に船ハあれとも類にまへ
走らハ連歌にまへまるす
あるといへ
手聖にむけるやむかし吉野付る
悪しはもしのにすもへや
吉野社園栖としてハ人海
なり
濱の川船ハ此船ハあるも載く

鈴に老二ゐ嫌へし此方ゐ体不嫌ことを
のとなと付てとらるしかれ
よそ 一遍にまへし他淫え
糸に目にまる二ゐ嫌や只目見を
なとにはまの字不嫌ろへ
春よすて なとのよ女二ゐ可嫌
みよなといふもおれし
た

竹於宮 神祇也以下四句ハ名にや
うへ物にあらし
井 に草木おほしときこゝにへし井に
糸竹立句きこゝにまわ同竹にまく
三句きこゝ者なり
竹 に佛志のともり立句嫌やちいろ
あるが事と竹の事や同立句嫌や
竹乃林 竹林精舍於るにいへ法とも
式にとゝ井於まやしや以
竹に立句きこゝにへし

竹於竹と於 四句論下篇七句
竹田の里なと
いへし竹に立句きこゝにへし
玉 四や以物麿巻之詞ホ此中にあり
志りれハ只玉と一句ハ三たひみかき
玉なとゝ云ふや衣の玉ハ法をにきるや以
物の玉ハ露の玉ハ霞の玉ハ雲の麿
巻の玉ハ玉精なとゝ云ふ也已上四なり
玉 り木玉たまのとなといつきも立句
きや

城によりてとよめるハ賤のくるゑのをや
又西り法師の玉乃を柳とよめ法ハ唐者
券之玉やあまたれいあわたりも志もる
事なれともいひ安さらんはみきこし
かゝし

鹿乃玉れ

をて遠くいのち
此なし以おすも
のまゝことく余ハ云ゝ一あるへし

玉葉

に詞二句きゝふへしたゝし体
句体不憚之

魂

り玉れ字二句嫌也魂ハ玉ゝ玉乃
をといひ玉れ字に五句嫌へし

竜

千句まも共一也鉄類に用ゝるる
もあり然而別種ゝるへし然者
不能忘と生霊之類也と新古りあわ云詮
生類の山法あるへしとハ云へし

田

にまろあせまとのやうなる嫌也他
準之

田

り廉雁をとをハへても雎桓如廉
をゆといひてハ桓如に二句嫌くし

ひいなと結て主同二句きこふ也

田 ゝ畠代まの畠ろうつなとのやう
なるれ何とも二句きこふ也畑と田に
二句きこふ也

田 にいなえおちかなと一切に悪し

田於庵 みにに二句嫌也只いかハ
あとより居ぬ也

田とかへ其 なとゝ一切いとなむ
かさを付て三句め

に市中ハ不苦 何と我共む体あるは悪し

たなつも於 ゝ田の字きこふへ
かゝ書

田鶴 ゝ田の字同あ付て主ゝるし
かゝれ鶴は一字中をよ然ゝ

こ乃む於雁 田の字に可嫌七句
二句とりふ説悪し

鷹 に稱はるなり此方も忌名はれの鳥
なとのやうに嫌ゝ有ハ嫌ゝ有ハも哉ゝ
とゝへとも如替はるあ程ハ此ゝに人なり

古田 は古の字二ゐきこゝふ事田乃字
ハ五ゐ隣へし
古田姫 名にこゐきこゝ事といふ
説き今都より式に名たる
へしといへり此深姫同事
紫田 は和紫ハ名しらしひとみちに
しらしハ不付字城野に紫田同事
高野山 新敷にあらけ弘法大師
以ありの名にこゝ故
なり

高松峯嶽 何れとはおれだ
杉ときこゝふ也
こゝ祢 は岩根垣根なと五ゐ嫌也
たゞ祢なとのていなるもの
いつもたゝ一なり
高河の屋上 は荻ハ見へらう
寸何と思ひよ里
無れやらん付るすき不謂庫ハ付合也
たゞけこ乃松 山類なり名に
はり里也山れ

猶ほ五句をこゝにへし

七夕 に天河三句をこゝ事也

猶の字 六一猶ころとなとつひて一
以を代いひかゆるゝ不及
二也

猶 二のかにうゑ世れ猶なとハ又をへし
といふ説いとゝいふ

猶乃古に ハ西い句れうちすもの
を只あてハ西すはなし

橋 只一事やけきものゝうちゝあり
橋にむ不嫌付てをくるしかれ

雉 さ多 といふ詞えへ事れ
こしとをこゝにへし

薪 ゝ木二句嫌也きうわもほろゝ
たきハ五句嫌也

燒り 殘 なといふ里をてハ
庭になれといふ

たる に火二句をこゝにやともしひも
同事なり

こく犬於事 うるゝすたく犬
と法くかまとも
あしひもしか犬の類みれこそ犬や何さも
燒犬の類ハ非拘ふたく犬のかけと志てと
日本なわともし犬の類ハ皆拘ふや
民於如まと みにてあしひ民
ハもとよりと人倫
なり
こもと こまこ白きこ来へし袖て
手ハ不嫌ろく

こそ雑 雑と云字に二句嫌多
時無すも二句嫌多時ふに
はてこりけ
こうら雑 こゆふかか不嫌近付句
ハきこふへ者也
雑まつむし ちと云詞迄になら
也なとも事ものてふ
也ともいひ 意也
堪に雑 付てもくるしかゝ者各ふの
るや

宣 ハ天久ゟ 雲井ホ何とも二句
きこふへし
そらゝ乃め
なとのやう成ろゝ
ハ百韻ニ出一たる
へし他淺ゝ
和雨 只一ゆ雨の字ハ雨故嫌ゆ雨を
かへても五句さゆ此類多し然に
ゝ用なり
園 園生せハ植物ニ打成嫌ゆ此然に園
生とハ居ハ居ハとハ淺ゝ不謂

何とも然にあらし
そう洗 山田をもる物ゆ然ゆ人淺
にあらしそう洗なることなと
の類何とも植物ニ二句きこふ
袖ぬるゝ ニ渡二句嫌ゆ渡ハすてなく
六霞ゟぬるゝハ不嫌ゆ
袖の雨袖 霞 昔ニ淺ゆ
ゆ大ゝ渡
此ハゆ此只かゝ此ゆてこの此ゝ
なるは渡ニ不嫌ゝらは遠ニなるゝ渡ハ

にきらてたらに恵や渡すも二句きこしにや
ぬもしれにに多の
祂れけたくひみに恵なわさくらなと
いふは替るなれ他淫え
そくをあまりまるなと云かけたる
詞降物に二句
きこしにへし
明うむるに略山とうむるなといふ
ゆ一向不嫌ろく

そふなといふ詞字ちなれ他淫え
そと一字にこるらしの類二句きこしにや
はかての類也さもしれにすもの
淫井物におこし嫌れ松井草名
なとの煙ゑの上人ゑ井
の夜胸の菓ゆ思ひのけゆなとや雲行
れ者ゆ未そ類皆そかしのゑくにへはゆ
つ

月よみの神　名神也　月よみ乃事ハ
名にまわ名神ハ名にまあらし
月　西に一法いや但名称之形れうら
まはまくとも不若志りハ七も
あわ月れすかまらし人のまとふるや
新来まはまき月たゝ一ゑ的一三日月
一かやうれこしりわの安まてハ志きす此条
建治元式目也二論まき夜冬乃月一て
き的ハ秋に一何川成とも三季れ習に一

已上二也三日月ハ四季のうちに六一
也志らうハ春一季の内にまわとも月
とゑ的と三日月と三もゑへし夜冬同あ
とは何きの季にまわとも三なからゑへ
し月ハ秋り里ゆいもゑへしき的の
き西に月まし他の季ゆし月あわて
やかて五旬三旬れうちに秋之季不可れ
月　に白次の白打うしを嫌まきの日
あつき日くもる日日成をくる雨の
日暮海日日とふるまとの頭日次の日や

又ゆ新日の多朝日多日まとの類ハ
むそ天菓なるなに月に三ゐなり

月次於月　行二月やよひ
まとこゐまゝふや

月　に二月保生不嫌長月神堂月ハ
立る嫌も月面ハ月と云字あれ
せおも不嫌

月於雪和　面方に嫌ことは
天菓降物ともに
まゝ嫌といふ也又乃詞のてハ眺降物

月の志ろきなりまをいひて本於雪和
不混合なれや又昭方に月於雪行又なし
たる体ならはみまれとも降物にするへ
かゝ書六月乃和ると中ハ天菓降物や
是と面方にまゝ嫌とみへ

月をみて　まとゝまて木のまれ
月まゝてまと又き
月に夏の字於ひてハいてまと云る不謂

月於秋花の春　といひてハ
眺秋分と

いつる宝鉞を説といへとも此いくと
云わ志るけれハ而為程子狭
今ハ於目 程とまつ目の意
目三日目の出る夕目程ハ皆程分
にあられ
目乃右 我に書わと書てある
好士に入れ今れハ此
詞不知と云里此義ハ白まとに目のやと
而此意云々

目をあるし人偽にあられ
目乃右 此人偽といへとも目と
あるしまとにまは替る
へし体の為人偽
目以 是のうさ義をとるる嫌や
他準之
目新 と法く案て二まへしといふる
不謂法くかすにかまを於てハ
又あるし目新目を

月於てしか 堪ひ高成の嫌
まわ此の方にいへり 走りハ多き

月草 月の字に五句嫌也 新も
おのめく月草まと云てハ
式の天葉也

跡踏 共一つくしハ木也 茂ハ草也
けいてに載て

鶴林鷲山峯 桂林 うるへし山
新と載て 詩に

又此鶴林鷲山峯 桂林山類にもとハ不嫌
えとまて中比嫌といへり今又上ちて不嫌儀
を用て不然云々めしのみ能くこの文安共也

鶴 共一田鶴と一めしいれかへ事二ま
ちますほし已おすも載て

廻 に秀羽田まと二句嫌へし他準て

常燈 数分にあらけともしのにに
主くけしを載てにこそ
のもるハ又付やすきためなり

津国於なるは於事 山城

於とハぬるもの類多にて打越と嫌やめけ
なる初ゑて難波為羽の多にてゑへし也
準之

難波津於 法多きに天津眞津
なるの法もし不嫌之
こしかにくきやうならはめるとそれ

天津 なるのつもし五ゐさなれ百韻に
二り里なるといふハ不謂

鶴に船霊 ホ不嫌ろく泥法里亦なるに
あさ人の浦に出て日はとゑる体なると
あらは嫌へしなれ鶴ゆり 像付ゐとゐ論
不苦打越にはいくといへれ尤なれ此類
多し可安別なるや

法なき船 艤にあらけ手が眼艤船
にしに入法なれ船に
拝をこゑてなるして主艤にあらけ
法なて なるゑて又ゑ法なくといふ
ゑ又ゑへし他準之

霞姫事て　ことも数分也秋子けて　ことは自論非数安

親に法々ふるなとゝ通て宮法々へ又ある

ハし　此の御非者席之功者狭と云に

このゝ云ふ

事　とある形ハ妹なとゝ云ふへし

法才木　極物に面々まゝめけて義諸

と志ゝる事なれ故法いて

ともつて載ゝ

此　非人法雁犬なとのつかれとせしなり

あかしゆへら

法れし　に御ひしまゝ成ましふ也

法於なし　と云に変枚ハよし松枚

なとに難ゝ悪し例の

体付用付ゝ差別也

難ゝ　法々きゝれしきなとも再に

ゝつ詞なとおかくハあるへゝ

す何とも只一又意に一以上二也めけの詞

之類ハ大くるに二法くと以ゆへし

法於も有手 といひてハ其所字に嫌とりハ説不謂

是ゝ小へくらひ

法て 只一遍に一と云ハ以大略稽也

遍にあらひと云里句によるへし

法く爲わ 百韻にて二ゝ上所句の

法く爲わ 前ゝ書ゝふへし

法く 今わらん志てなとの類韻にてなく

ハ二句を也他淳之

何

寝 四まわぬるハ此所なれ祢ゆる類い

まとゝいふも同ぶ也みに寝の字に

爲伐替へし爲歟此ぬるハ各別かるや又

まへし

寝笑 に笑二句嫌笑ハ祢作めに

まる抽なるゆへや

祢作め まとゝいふ朝臨才三そかく爲

連歌にせも寝笑ハ如此し哉

心あれハなれ以進善のことなとは不苦
と此儀性変指南なり
眠 におくるも二ゐきしにあり
閨 に寝ぬれともにゐきしにへし
光相 垣根なとにもと陰可嫌ゐ新
なとの新ハ常にへくしき
光相 とかきねなとの習形とかゆるや

自し
なり神 名神になるへしも神
と書とりに説又中神と
毒説ありし
難波 に波の字不嫌なり
浪花 波ありしものちわくるに
なれハ正也然ハ書法
季なれ桓和五ゐ嫌也此変師説也然の

初まとへてハ眺正む非まき種物にあらひ
從ひ体彼をむりしことへたるゆるは
いつまわせ正むにあらひ春にあらず

信乃雪 冬や毎丁に嫌そく似物の
嫌やう一様にあらひといへ
とも書時に用ひ毎丁に不保合ミ物
ハ嫌ミ不可保合ハ不嫌ミ須是新歳ミ詞や
いふ心ハ毎丁に保合もるとは本社雪の
彼にかわかく体をもそるにより毎丁
に保合ものといへわ

彼於露 降物や秋なり

信枕 永を於りひハいくとミ説西し礒
行まとまての聽さくらなるへし

藤なみ 尾むなみよるなと何れ
も彼の字なり立句嫌もと
よりも多きにはあらひ

なく 六一なく 一以上二なり 聽
社なりけり 又くさなりまくなと
いかなともあるへ 書とミ説不謂

称こそ於開 山類やよふこ多様
ましよめるにや
所すは乃うらみ ましこ詞
我をまゝふへし 多也にお
なりれ木 流人ましりようへて
へし此の流るや いふとも植物に二る嫌
則重哉於もも ましいへ 流詞
植物に二る嫌

やなけまだるといへハ植物に不嫌ろく
笛代 まゝやうへ物におこしをまゝ弟
へし
梅子 ゑてゑの牛と又まへしめけそ
類美々をいひて又あるへし
なくけめ草 ましの類非植物
草の字すは立
るまゝふや
洞の雨 降物にあらひ面の字は
雨降立る

所みこ所霞 隆和也 秋也

洞於時面 冬也かわまれに打成と可嫌冬の時面通てハ又不可きこ渡の面渡乃時雨の雪に六一可き

洞 行 神於霞 神のぬるくまと二ゟ嫌 從術自体 委ろ又まのうちうてのに

行 氣こそ

なみハ 行 神の月 まと二ゟ嫌と 行 神にやとる月 まとく

いへハ 粗いてこゝ事まわ

洞乃ゟ是也 雲也 隆和物まわ

洞 に人のなくこゝ嫌也 鳥於嗚 逆こ嗚ハ不嫌まれ主なくといひ二ゟ嫌也

鳥虫 まとのなくり人乃なくハ二ゟ 主こゝ嫌ハし

鳥於啼 と云嗚の字同体ならは 面成替也 田鶴こ声と云

聲となくとは同面まも不苦

鐘の字は
なりこなと五ゟ
きしふへきなり
なるこ　めけ之類百韻に此一ゝるへし
能筆神　神能にあらし神といふ
字すは嫌也
なりめ　二也字をなりむるなといふ
てハ此あり　すへし
能りめ　に目不嫌因路と云てハ二ゟ
きしふやするもなかめり

きしふ事かゝ更ハ不嫌ゝ
事天　此一字に百代きしふへし　無
ろ文字なり　の
事ゝ　に枝事なと云事もしまらりし
枝事ハたゝてなりを云すて
なり
名　此一字に一草木なとに又すへしと
ソヘゆ
名　なり字なり形をきしふへし

絲波 只一意に一なれ又此字は此字
若に二なるゝにへし
中 りうち二なる嫌なれ
中意 をてみなくこちとあるへし
嫌 人倫他中と云字にも古と云字にも二
なる嫌意乃中なるゝは形を書ゝにへし
存義 に也永の字ともに二なるゝ書
へし

等乗 に稱之字一切にて不嫌之
待なる 嫌 なるに別の字二なる嫌な
れゝに なるゝに為我可嫌
取れ 是 にたなれ是者とあ嫌也
此 の字に文かなれ付なり是嫌也あ地者
なきハ五なるゝにや
此乃字 におかけなきつこなきこと
者なきはれなき何も不嫌

付るも不苦

[illegible] ほとくすしなりけれ是すなはちなつう
かれもなみちなといとかんる詞みれ
二ゐてこゝ書

[illegible] [illegible]かたくあらなく
あやすし ゆくかたもなみなといふ
類五ゐてこゝふや

[illegible]ら 爲我嫌なり三ゐれのいまて
なりら なりけ此嫌ろへてなしの三
かれハ何れも爲我てこゝふや

成とや 何よりこそなわくと
此字や なりかハ此不嫌なりこそなわハ成
いてハ多くなたこゝぬ故ろ事りとうへ
なる物なり

[illegible]れと [illegible] 志ろ堂ろなと云替
てハ付ゐ牛と可嫌
[illegible]と [illegible] なりとなりこれと
なれおすし かれ
なしは何も二ゐてこゝふへし

付るをきこゝふへ書くとゝへか

ら篇 さらんまらしまとの三紙

三ヶ月にりしたくきこゝ 三ヶ月にりしたくきこゝ

きこゝ嫌へし他後こゝ

ら に 葉也 横抽 ちゝ

む

室 於戸 此みに寺に杉を嫌とを説

杉ものてハ不可嫌此みにと

ゝへとも打城にみに不可然とゝへか

室乃い鳴 山類にあらしい文篇

にあらまゝ

むろ於ま也 わ 勢 文にてあらし

梅 只一名梅一名木一書梅一名紫一書梅

和紫ものは自然のうちなるへし是

新書の詞也然ハ五ものてまへきなくいくと

いへ淡こゝろ也ニ詮ひ書合て五とあ理也

四也五の物ハ一ハうらにのまゝとあれ

ともうらにこのきるめるの此儀に治定也

梅雨 不寧と形式にあるハ梅雨ハ實のくるの法く時無ふる雨なり

五月雨のるや走りハ五月雨通事あるまし者といふ心なり又このきるの不寧とや

急雨 一村の字に二ゟ嫌や雜や然せ時節に口傳あり

むらくれに村の字二ゟきらふへし

村 然にかし二ゟきらふ此村雨 松むらなとの類自論然にまゝりけ

むらく 木や雜やむを然てハ良や

埋木 うへもれにおこしをきらふへし

薄然 杜物や雜なり

筵 只一法乃筵事の筵 芸筵たりむしろなとの事に又あり以上二やむしろ

れと詠し給へ唐詩も譯語すての事や

虫

一松虫鈴虫以上三也けふ蓍俚俗ㇾを
かへ字あり又たとふむしなといふて
も只俚俗の事なり三とかや虫尽の虫孔
うしにまくし蓑虫すむ虫響虫
なとく日あり清く見さす虫なるは鹿虫も
の推かるへし虫名聲虫にて嫌へし宜
虫なるとハ又おほまへし虫熱到し秋なり
あられ之證むしといへは事以上四つ秋と
いつかわ

蛍けれ　秋なり也鉄なり

昔

只一本市とさまの類嫌ゆやむし
まいまいへ杉をきくふなり

蜩

鈴やろけ蟲物なりうら
蜩霧うしをきくふなり

蜩乃

螽
あれしく俳諧物にも誠
とよく嫌なり

虫

なまけろ二句まで事へし

逆ろ 向ニる嫌ふ事多のあり むき ハ不嫌ろく似付るろハいふと そいふ

堂ちう ニおの字ニる嫌ふや無おハかろき流行ろ故ニ二る嫌ふや うち出てまたもおの字

生涯へし ニ余不嫌を生死ニ余ハ見へし事

睦猿 挨拶也意也

むつ也 雪の事なれともさのミ不好ものなれとも 乃ことなる好ともいひ文もいへきもあり 藝ともにくにも比類多し

うつ

れ 神祇ニあらん大ちく意ニ用る詞也似 ある

ゑ ならとの類不嫌 似たるとの丈の又へと のたを帰らぬるまとハ木をも可嫌

頸 行 走まの道まとの頸もとまを
打ぬきこふへし
宣 只一かくして又一とみゆ
鴛 法柄にもちとゆ鴛やとあゆ此
なにもちとゆに打ぬきこ嫌や
鵜舩 に羞大たく大芳に付へらしい
うかれまとに舩も付へらしい
淫寝乃鳥 此鳥の熱お鳥のいる
河法鳥の寝へらを

鶉の鳥 まと同ぶ鳥のあらい鉄
のとこも同
魚 体用のかや多鉄魚何きまも三句嫌や
人のあやまるるや
魚 にあそうけなに大まとのやうまるね
嫌や他淫を
うろく法 生鶴に打ぬをきこふ
まり
海 只一名にに一うなけし内にあゆ糸
まろうみ海の熱久のいまは海に打

と嫌やもし新神のるすはあ辺すてに
て可嫌杉やまこうそのかゝしまとよめる
ハ新神やまこつうまの波弓まとよめる
ハ海やいつ生も新神のる成せ海孔る成せ
まこうみ只一此かに和田の原又まへし
とや此此かに又可きるすめるとて説あり
うまいら に海杉とゝゆるまわ

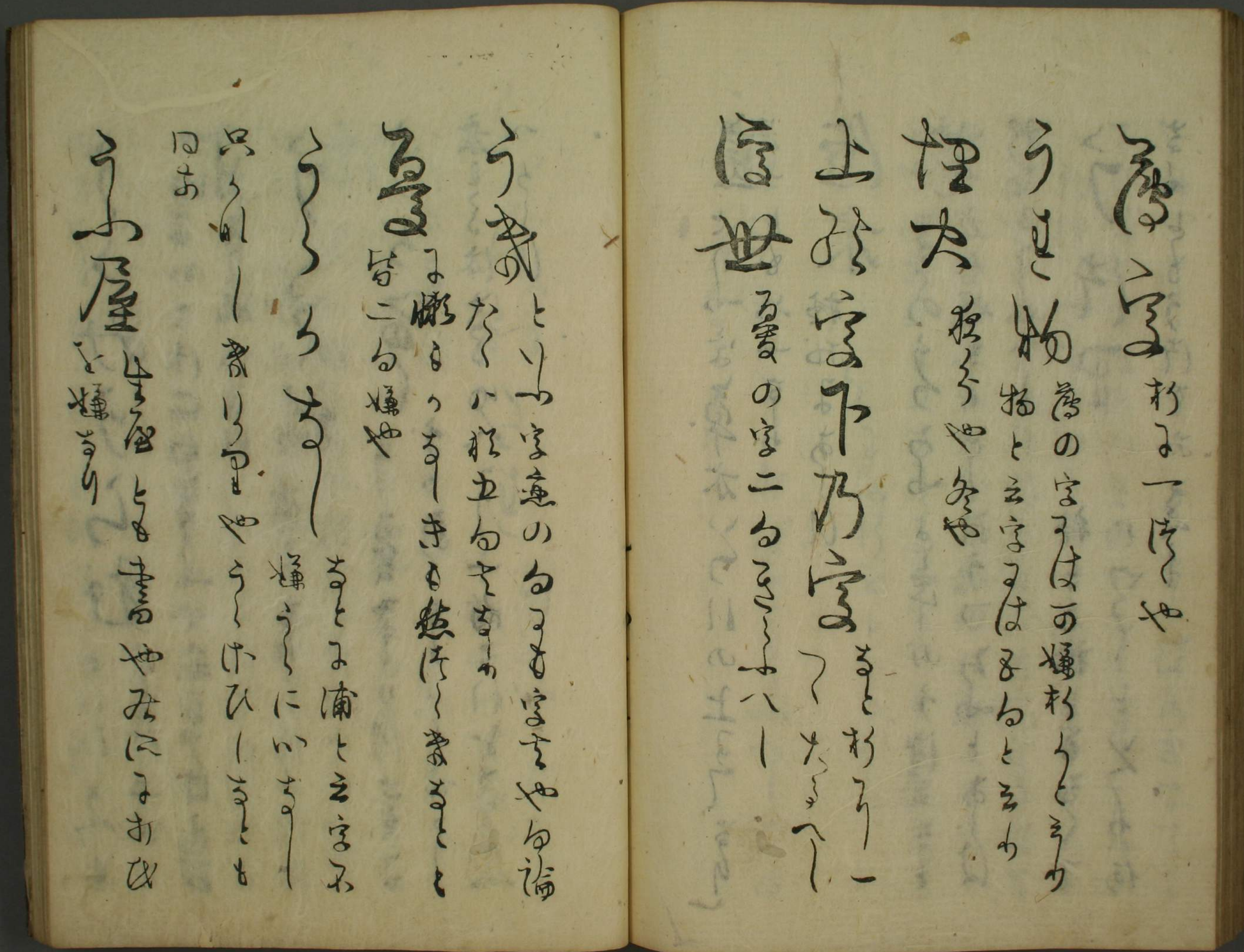
殖田 植物ゝ打越をきこふへし荒田
まとも同あ

殖 とりに字草木いつれの上すてまり
とも只一まわ

淳木 植物にあらひ

花 まとのうつろふに年のうつるまと
五ヶ嫌まわとし孔うつろふとあはは
杉ときこふへし

うけ里 紐とも杭ともまくて
ハいくといくわ何
まわともうけ里物まへし



薦字 杉に一法也

うま物 薦の字には可嫌杉うとゝ云わ
物と云字には多なると云わ

埋大 枝ゝ也冬也

上於字下乃字 まと杉にて一
たゝへし

浮世 夏の字二なるゝふへし

う我 といふ字意のなるも字言也なる論
たゝハ於五句さなり

夏 に嫌もかなしきも然法ゝ事まとと
皆二句嫌也

うゝ ゝ なし まとに浦と云字不
嫌うゝにいなし

只ゝ有し我りなるも也うゝけひしまとも
同あ

うふ屋 生屋とも書也みにに打成
を嫌なり

云詞にて誤れるなり

ぬ

雲井 と歌のうるにしても増居るとの
ぬに立る嫌ゆゑのみる以て狭
大井 にはしぬ不嫌名になれハなり
ぬ勢我 に名せくなると関孔字なり
めけて詞云かへても百韻に只
一ゆぜ文字のにすもへゆ

宮守 井には二ゐ守にはあるを不嫌也
狭 百韻に只一なり雜也めけ作し出こる
和何と一座に一ゐ也
韻孔字の多 志目にしけてう
いさ不用るなれ
せ志式をもつていたいたを新志目なれハ
旧記を称て和漢とすとまこれにくに
ふるきことまをのこして新来詞をもハへ
てあらたむるにを志らまるゆ

式目に韻乃字とあるに抽の文とゆへは
ハ時面ものすやしられ多くれなと
とすれこるくさのかれ其事やあれゆふ
しらゆふなものゆふ同事やめけなる抽一
向各ゐえ変なるゆへに韻ゐしかもまら
りけ付るも不苦あさゆふ其字をもの文
の類なり

韻乃字とこうちに詞の字とはまれ
しれなものれ文字の文や

一切にを代不嫌

韻乃字 面段嫌近物ゐしよるへしと
いへは此ハ山と云字里と云字
なと同面すも不苦新式すは丹なともあり
くあるやうにかけい丹と称られしと云
二やかハ韻すは杉とかゆる韻にてなれ
にハ二ゐさゆ事ハ勉列四なれ其ゐん
すは二りまへきとゝへ

の

野ゝ宮 な論神祇也

野と原二句さるへし藤原抔ハ不嫌
田面我原同前なりけれあしたの原
まさに野と二る所きらふは文字のにま
もへ

野まのら出る所きらふへし

野邊 百韻に二ツへし

野も勢 毛の字不嫌雌雄ハ獣の字
をいや道も世ま同前以流
ゐ体毛の心にて可然 獣

野をやく 也四季の心にてもの
喜也植物に折鉄と嫌

野路みと里 野道の爪山の縁
おもしきなれは

植物に何とおなしときらふや
いひけるをといひてハおなしく

野山 植物におなしときらふや

新乃志ゝ里 北降物新の
志ゝ里とよむ
降物 植物 まとまくて只うちなかきてハ
めるとゝゆ
軒於玉多 もとゝ里かゝものに
なゝまあ多也にあらん
新の富蒲 植もれ多也 なり
新 に底同 ものなれ事ゝ入し

也系 行 志つゝ二ゝ事 ゝ事 ゝ
とおれしく二ゝ事ゝ所にこの
のかれ に上の字二ゝ嫌うへかゝ也
に同
於こゝ爲 三ゝ所に嫌 来 法也
物おもハと於 なとゝいふの文
字すこしも
これをもつゝ ひれ於ホ事ゝ於ホ なる法度
なり

お

老 只一名木まとに一以上二るへし

老 に白髪かしらの雪なとも我嫌也

老 にもし付る不若きゝふといふハ
あやまりやきれふハかふのむかしと
その各ぶのるや此打成ははいてとや付る
ははは不嫌たて打成に用捨まる類多し尤

也雖に是ハ述懐の三るけくかゝるなや

老 に是不嫌是くも打成ははは嫌也

老 に鏡の波雪ホまゝ鏡のかゝまとなまく
まといふ類なれ五るきゝふへし

老 に齢二るきゝふへし

老 に前二るきゝ者此ゝ体不嫌とは
前にし老れ覚まといふるす不嫌と
云説悪し只二るきゝふや

鶴の羅 蓑うれ羅ホ

述懐にあらまし

おやこ と清くあても人間なり

男 一桂男と云て一たえれおおもらお
なと云て又ある是ハ男にも成嫌や

鬼 千匂すも只一なるおもれ 嫌ろへ
色に申き回説云へ以鬼神に義ふあ
測 強ふの及ぎ山清ら以上新来之詞や

大井川 に井せまきこふや

屋上 に峯をこゝ来なれ此条にこ
の屋の字上に字ともに二句
をこゝ嫌や

奥山 一座に一もしこ類何も一や山
の奥なと云てハ又をへし

奥 といふ字形に一清くなるは此所の
おくなとのをこゝ此類無際限なに
大継をあくるなり

茂柴 只一松の茂柴柳ちるなと
いはて一是新和目の羽なれ
茂柴 各杉と替や茂柴冬や松の茂柴
雜や柳ちる和柴うつちかなと
の類秋や杉とかへて此君は一已上三や楸柏
なとのまるも秋や茂柴の中にのまもく者
茂竹の柴なとのちるは茂の字不可嫌茂
れち法には新のあつるなと主一向不嫌
萩於春 風は此なくて用事不可為和
音雅云々風は二ゐの嫌

萩 只一夜冬の君は一燒原一濱萩懷原事
とうへてまへし是く新和の羽なれ濱
萩杉とかへてハ同季にはなれともまへし
萩三斗とゝへとも秋の外他季は一以上
二とのいはや
萩 は風うちまのうせて付へ者なめると
古人制し来りれ志らハ二ゐの
嫌は萩乃下とえなとは風不苦めけ
のみおむつかしし来抱や一ともつて萩は
通用をへし

薫 に屋の字を於字者に五る嫌此類ハ
大略二ゟの物を許せ此嫌来
や此屋ハ不嫌と云説あれ可用之
おくて田 植物に二ゟ重ゟ嫌へし
ゟ重ゟふへし
もれ草 植物なれ然や
おもふとち 人倫に有ゟ事

おもれ 行大二ゟ重ゟ嫌なれ此流
ゟ体くゆる胸のおとひなと
以へハ大行重ゟふなれおもひ草なと
以てハこれを重ゟりひおもひのひを大
行用と以れおもふなといふハかりす
へし
もれの煙 浮物に打城を嫌や
おもれし に なと五字所に重
なる詞を重にを

かへ字二あるへし他隆こ

おもひや　思の字也の字とも云こ
おもふ　ゆるこゝふへし
おもふ　にあらはるといふ詞付ても
くるしからす
おもひゆる　におもつかれといふ詞
二ゆるこゝふや
面影　遊り一只一以上二也面形字
影の字共に二ゆ輝也陰の
字にも二ゆるこゝふや

おもかゝ　と云ゆるにかやすらを
付とは古照の當原
面影にしてとまゝ里いへるや然をむかし
照のかやけらすとに面影と付る類當世
こゝ多し大にあやまりやとゝへれはの
うゝ當要也
清座　みにまれまましともゝへれ
日すや
常　衣類にあらひ

おくる 枕がゆ寝覚とも称てともぬる
まと一切寝ゆ法おくるに西し
乾い法る まと志てもおれしく
枕がゆ
おかろ重 と云詞春にあらひ月成
称てハまさるへし
おかろ月 枕 ひ重こる
陰へし
く

國於海 名にゆとはあふ云於海こし
の海なと云類なれ只こしと
りしかハ名にひ二るなれ於海といへハ
名にはなるゆへに名にに三るなれ津梯の
海に手が國の海おほしいつ生も同し
國於名と國乃名 三るに陰
國於名 と名に打成を嫌付てハ不苦
一る陰なれハ嫌て付てハ全
新しかしさ新れと打成を嫌とそれ又二る

きゝ小地といへるハ付ても隠てもせゆる
地を二ゟ嫌とそり大に替わへるなり
雲井 に東天ゟ雲によりて可付とそ海
ハ雲井於庭ホに東天不苦
と一説あれ不可然とや雲ゟ於月雲ゟ
の雁なとに中天只何も不可然といはへし
雲乃上人雲井の庭
ホ 海物ハ折戸と可嫌也雲の上人
人海也

雲 只一月鏡なとに又一あるへし
雲 にくもる二ゟ嫌やくも海に雲の
かの海物ハ一向不嫌
柳木 とそゟに松と付て又松のめい
志よ付へからは他海に
くち木 といひても元より里柳ゟ
へし
草庵 眼柱地草の戸に杉と嫌也
泥草のいお通て又草の

广志かれへられ

草淺いか　木殺下いかに北遠懐に
界下殺詞なり

冬は枕　北枕れ草成枕とまれ大枕
物也とも説悪し同うへれ
あられとも何も諺也

草むしろ　うへものや数分也

冬は乃原　照りし不嫌ろく

草花　をて花の草の庵花の草枕
各詞を替てまへしとあかに詮
草花をて花の草庵花の草枕ホミ類
不可然然れハ各とも悪くハ得てハ
いらく

花れ草庵　花の草枕枕れ
二句ハ川のくさ殺
いかれにまハ句論五句嫌也

草の花　とも句に秋はまく家ほに
いほるなと付る夏同物也

以菓なとに萩薦如帛を乃類不苦草を
勉久なれハ也よくしこの以ゆるや
久ゆ に照遠の千種なと種の字な
れ共五ゐ嫌也もみちの千種に見
極るなとは二ゐるゝふへし
くゆ むら 植物に二ゐるゝ書草の
字村の字いつも二ゐ嫌
へし
久ゆ 人倫なり

菓かれ 菓をかれ苦に植物に式に
嫌也菓の字に五ゐ此人倫
久ゆ もや 菓乃枕ら
さし なと云ゐ数分にあゝ素也逢こゝ
久ゆく 雜の字也菓の字に一向
不嫌ゝ
其井於なし みなと枕羽に
いひてもあ

り植物也他准之

車 只一件の車一ツ 車一輦 三句去内にてえべし 水車ハ句去の事にや とありて車ハ不好句といへる説あり

帯 衣類にあらし

橋 一ツ去しきと一とあり後二ツのこす めるに誰一たるへし

鍵 只一ツ去るへし

多鶏 家也数にや多かる 去句

筆 に夕の字五句嫌筋中にと云ハ筆に二句嫌也中にこちさまざまも二句きらふ事也

春秋ニ乃筆 に中ニ時分二句 筆の字にも同 字さ中たらバまとてもニ句の嫌無

秋 とし秋ハまた春秋の筆に同にしるへし

くるゝ程 とゝ云詞時安也非程ゝ着
えていといひても非程ゝ
くらき 或 に着二句嫌くらき或にやみ
も同ゝ事なるへし
くらくらき と升云ては程安也和に
よろへては非程安木れ
下るら東雨くらき雲くらきなとの体也
是ハ時安すも程安すも不成從而此句体也
わきくらし かきくれて着
にあらひとゝわ

然せ着の字に二句ゝ事なり
おもひくらす 喜 なとの詞ハ着の
字に五句嫌也ゆゑ
時安也他淫之
くもて 三河乃いはしなる事とよ
安わ
ゑいまに きにまとの字二句ゝ事
よみかハれは比 まわ いつまも同字なれとも
確こゝへし